

日本綿布がこの地に創業したのは大正6（1917）年、来年で創業100年を迎える。豊富な水と温暖な気候に恵まれたこの地域では、江戸時代から綿花や藍の栽培が盛んで、明治時代には藍染めの厚地織物である「備中小倉」が特産品として全国に広まっていた。

創業当時から社名に「日本」と付けた創業者の先見性

ジーンズに使われるデニムなどの生地を製造する日本綿布は、広島県との県境に位置する井原市にある。この地域は古くから織物業が盛んで、現在では井原で生産されたデニムは世界的に高い評価を得ている。中でも日本綿布は、その高い品質から多くの海外高級ブランドと取引をするまでに成長したが、そこに至るまでにはさまざまな逆境と決断があった。

ものづくりを深め、人を育てることこそ進むべき道

日本綿布

岡山県井原市



▲日本綿布社長の川井眞治さん。「うちのデニムの生地の色と表情は、ほかとは違う。買ったばかりの色もいいけど、半年たったときのもはもっといい。ジーンズは自分の歴史が出てくるものなんです」



◀バリの商談会にて

社名 日本綿布株式会社
所在地 岡山県井原市東原町 1076
電話 0866-63-0111
HP www.nihonmenpu.co.jp
代表者 川井眞治 代表取締役社長
従業員 65人

「備中小倉は天然の藍で染められた綿織物で、大学の制服や海軍の水兵さんの制服などに使われ、輸出もされていきました。今から100年以上前、私の曾祖父は自分で染

めた糸を近所の奥さんたちに織ってもらい、備中小倉をつくっていいました。そしてこの地に工場を建てたのが、うちの会社の始まりです」と、日本綿布の代表取締役社

長・川井眞治さんは言う。「岡山県井原市の会社なのに、会社設立時から社名は日本綿布です。私が小さいころは大きな名前だなと思っていましたが、今となってみ

市場の変化、さらには自然災害など、企業を経営していく上での「逆風」は数えきれないほどある。どの会社にも当てはまる「向かい風」を見事に「追い風」に変えた、社長の先見と決断に迫る。

特集1 逆境をチャンスに変えた社長の決断